

【地域情報】

聞き書き 龍神と大蛇、そしてツチノコ騒動

聞き取り 平井亜未*
話 平井亜未の母・叔母
解説 加藤寛之**

1. 解説

大蛇を見たという遭遇談や、大蛇が何かをした、池に龍がいて云々といった伝説は数多く存在していて、祭りとなって現代に生きているものも少なくない。埼玉県にある城西大学近辺でいえば、鶴ヶ島市の脚折雨乞（すねおりあまごい）は、祭りのパンフレットの言葉を使えば「四年に一度、巨大な龍蛇が練り歩く」。全長30mを超える龍蛇は龍神となって300人を超える担ぎ手で白鬚神社から雷電池（かんだちがいけ）へと練り歩き、雨乞祈願の後に宝珠奪いでバラバラに分解される。途中、国道407号交差点の通行を止めて横断する様は何が起こったのかと目を疑うほどの光景だ。



脚折雨乞い 2016 龍神国道横断（埼玉県鶴ヶ島市）
提供：ごいっとビジョン 加藤良夢&栄子

* 城西大学広報課事務職員

** 元城西大学広報課課長

後掲させていただく秩父の大霧山山中にあるという大きな窪みはヤマタノオロチが休んでいた場所だという伝説だ。これに似た話に、武甲山の中腹標高600mあたりにある大蛇窪がある。ここにかつては、大蛇が生息していたという。武甲山に降った雨は大蛇窪から地下へと流れ込み、秩父市内にある今宮神社の龍神池へ沸きあがって田畑を潤すとされ、秩父大祭は水を通じて恵みをもたらした龍神を再び武甲山に送り還す行事なのだという。

当然のことながら、農業に大切な水をつかさどる龍神がいなくなれば災いや早魃が起こったりする。一つだけ紹介したい。二松学舎大学附属高等学校社会科研究部『東秩父の民俗』（昭和42年2月）と秩父民俗研究会『秩父民俗』第10号（昭和50年3月15日）に田中正明「東秩父旧槻川村の民俗（四）」には、大蛇と尻あぶりについて大要の似た記述がある。後者が分かりやすいので以下に示す。

白石の話である。昔、白石の上に沼があって主の大蛇がいたという。ある時ある人が火縄銃でこれを打ち殺した。このため、その人の子孫には背中や脇の下にうろこのようなあざがあり、毛の生えている子供が生まれるという。

同じ主の大蛇が打ち殺された時、沼は決壊し白石一帯は大水につかった。この時ある人が大蛇の死んでいる様を見たが、のちしばらく病んだという。

尻あぶりも大蛇にまつわる風習なので書いておきたい。

尻あぶりの行事にも、次のような由来が伝えられている。昔、高坂（現東松山市）に大蛇がいて住民を苦しめたことがあった。そこで退治しようとする、大蛇はだんだん逃げてこの地まで来て大いに暴れまわった。しかし、不思議なことには麦の団子を食べた村人には、その災いが少しもなかった。以後麦の団子と麦藁を燃して尻をあぶり、災難除けにするようになったのだという。

尻あぶりは、城西大学に近い日高市、毛呂山町にもかつてあったことが分かっている。飯能市原市場ではケツあぶりとして記録されている。飯能市原市場での記録の一つ、西村一男『ふるさと漫録～奥武蔵原市場の今昔～』はんのう文庫⑥（平成11年）によれば、「7月8日薄暮のこと、各家々では表で麦わらを燃やし、この火で家族中が尻を向けて囲むから“ケツあぶり”で、ただそれだけのこと。おもしろくもなんともない。極く単純な行事なのである」とあり、写真も掲載されている。ここでは大蛇との関係が語られておらず、この時点では伝承が途絶えていたのかもしれない。この本が出版されてから20年以上が経過しており、当地でもケツあぶりは現在継承されていない。

話を戻す。雨乞いが遠い昔の話かといえ、そうでもない。飯能市の畑作地域である精明地区の双柳稲荷神社が発行する「双柳稲荷神社だより」令和5年2月号に、龍泉寺にかかわる戦後の雨乞いの記事がある。以下に主要部分を転載する。一部読みやすくしてある。

双柳の雨乞いの記録は名栗の龍泉寺にお水貫いの記録（雨乞代参帳）が残っていますので、その記録に重ねることが出来ます。

その記録は下記のとおりです。(尚、龍泉寺の記録は大正12年から始まっていますが、龍泉寺が火災にあい、それ以前の記録は失われています。)

双柳の雨乞いの記録

昭和26年 8月 8日	代参 (使者)	関根良介	小川開久
昭和31年 8月13日	代参 (使者)	加藤善兵衛	小川 進
昭和39年 8月17日	代参 (使者)	滝田京次郎	小川定義

◆龍泉寺の代参帳には、昭和39年を最後に、それ以降のお水貰いの記録はありません。

◆尚、雨乞いに関しては双柳に限らず、旧精明村（飯能市役所から東方へ芦荊場、下川崎、川崎までの広域の範囲）の各村々でも、お水貰いに行った記録が残っています。単独で、あるいは何村か合同で代参した記録が残っています。

伝説の大蛇とか龍神よりも、現に大蛇を見たとか、大蛇といえばツチノコだとかの方が現代的だと思う。後掲させていただく大蛇遭遇談の前に、ツチノコから入りたい。

いつ・どこのことなのかは判然としないが、坂本時次『秩父の民話と伝説』木蘭舎（昭和51年一刷・平成12年六刷）には「ツチノコ」と題する話が収録されている。概要をまとめると、真夏のある日に空さんが山奥で炭焼きの木を切っていたとき、風の音がだんだん近づいてきた。音のするすすきの原をみるとザワザワ動いて近づいてくる。その音はシュルシュルと変わり、目の前を直径30cmもある大蛇が通りすぎた。不思議なことに長さは2m足らず。大蛇が出たと隣近所にはなしてもなかなか信用してくれなかったが、四・五人で翌日に山へ行ってみると、すすきを両側に倒し、山を通り、谷を越え、大蛇が走り去った跡が残っていた。村人たちは「ありああ、ツチノコだったんべえ」と話しているというもの。

次はツチノコ・マニアには知られた話らしい(?)ののだが、飯能の地方紙「文化新聞」昭和48年6月21日付にツチノコ騒動の記事がある。それはツチノコよりもっと凄い蛇を写真とともに掲載している。概要をまとめると、昭和48年6月13日の昼頃、飯能市の小岩井で若い大工さんが発見した。その時に殺され埋められたのだが、「あいつはツチノコじゃあないか?」となって掘り出したところ、首根ツ子の所と胴の真中あたりの所から手と足が生えてんじゃありませんか。長さは約90センチで首よりちょっと下がったところが牛乳ビンぐらいの太さで、ツチノコじゃあないかということで近くの第二小学校の先生も、こんなモノ見たことはないと言いつつ首をかしげていた。ホルマリン漬けにしておきなさいと容器を貸してくれた。ホラ、これがその問題のヘビ? というもの。その道の偉いセンセエのご宣託で「ヤマカガシがカエルを飲んだだけ」が結末だった。

さて、後掲させていただく大蛇遭遇談も結局のところアオダイショウなのだが、それだからといって空さんが見た大蛇が何であったのかは分からないままである。過去の人たちが自分の身をもって伝え、見てきたことを、伝説だからだとか見間違えたのだらうとか、あたかも合理的に否定するのはいかなものかと思う。そのときは見過ごしていたことが後になって“あれがそうだったのか”と気付いた体験をもつ人は多いと思う。だから、素直に伝えることは大切なのだ。

2. 聞き書き

これは、平井亜未が母と叔母の記憶をたどって聞き取り記すもので、その1は大体今から26、7年くらい前、母親が40歳くらいのときに経験した話。その2は叔母が父親から教えられた話。

その1 母が見た大蛇の話

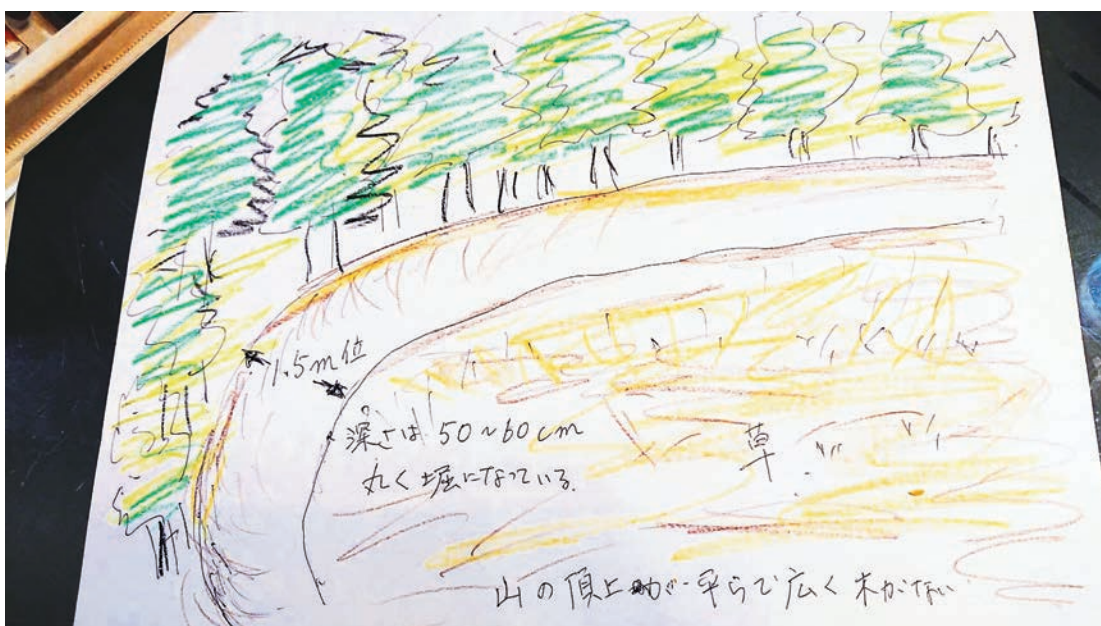
母が見たのは今から26、7年前の夏、東松山市の西本宿1639付近。県道212号の道の真ん中あたりに灰色の細めの電柱が倒れているのを発見して、道を塞いでいるので避けて車で通り過ぎようとした時、ズルズルと動いたのでバックしてよく見ると、濃い色の灰色と薄い灰色の縦筋が入った、胴体と同じくらいの太さのヌメっとした顔。ドキドキしながら見るすぐそばの側溝に入って行った。家に帰ってから、図鑑を調べたらアオダイショウだった。

その日母は興奮気味で家族に話し、みんな笑い飛ばしていたが、毎回その道を通るたびにその時様子を語ることと、母の性格から見間違いではないと確信している。

その2 叔母が父親から小さい頃に聞いた大蛇オロチの話

「わたしが6歳くらいの時おじいちゃま（わたしの祖父のこと）に連れて行ってもらったから場所はよく覚えていないのよ。秩父の三沢にある山。多分大霧山。でも妹は大杉山って呼んでたけど。その杉の木を四季会というグループで育てていたのよね。その杉の木の下に生える草木を刈る“下刈り”っていう作業について行ったんだけど、お父さんが大きな溝を指さして『ここはヤマタノオロチが寝てたところなんだ。』って言ったのよ。

昔は学校で日本書紀の映画を見せてくれたのでヤマトタケルとかスサノウノミコトの話は本当なのか!?って幼心に思ったのよ。」



叔母直筆イラスト

山の頂上が平らで広く木がない場所。その周りに深さ50-60cmで丸く堀になっている。幅は1.5mくらい。